前回までのあらまし
幕末
長い鎖国が終わり
西洋諸国との貿易が再開する
神戸の
外国人居留地には
双日の源流となる
鈴木商店の金子直吉と
岩井商店の岩井勝次郎が
出入りし
理不尽や侮辱に
屈せずそれぞれ
商売に
励んでいく
日清戦争が勃発すると
鈴木商店は
樟脳を目当てに
台湾に進出し
後藤新平と出会う
セルロイドの
生地を海外から
輸入していた
岩井商店も
セルロイドの
国産化に向けて
鈴木商店と組み
事業化を進めていく
一方、大阪の商人は
五代友厚の下で結束し
新たな産業として
紡績業に着目
さらなる
紡績業界の
発展のために
日本人による
綿花調達を目指して
日本綿花を設立した

第2巻では日清戦争を経て
八幡製鉄所の開業そして
日露戦争の勝利の後
鈴木商店・岩井商店・日本綿花の
双日の源流たる三社は
さらなる日本の近代化と
先進国の仲間入りを目指し
時代を疾走する――
sojitz
Hassojitz
発想 × sojitz

第1章　日本綿花　綿花を求めて、インド・中国・米国へ

まず綿花の調達先はインドからだ
渋沢さんや大隈さんから頼まれて私が視察にも行った品質に問題はない
日本綿花 社長
佐野常樹（さのつねき）

しかし社長 今は香港経由でインドから直行する船がありません これは危険です
確かにそうだ 直接調達を進めれば嫌がらせを受ける可能性があるな……

ありえそうなのは……
運賃の値上げ 積み替え地での意図的な遅延……

ううむ それでは日本綿花設立当初の目的が果たせない あくまでも日本人の手による調達と輸送が必要なのだ

佐野は広く働きかけを行なった
日本綿花の佐野さんうちにも声をかけてきたで
政府や渋沢さんにも働きかけているらしいじゃないか
さすがは二本松隊の生き残り※佐野常民に見込まれた男じゃ

※ちょっとこぼれ話参照（51ページ）

日本綿花　社長
佐野常樹（さのつねき）

インド・タタ商会
タタ財閥 総帥
ジェムシード・タタ

紡績業界の幹部
渋沢栄一（しぶさわえいいち）

佐野社長の思いは
実を結んだ

明治二六(一八九三)年
インド側の綿花供給者
タタ商会との間で
日本の紡績業界が
引取数量を保証する
ことで日印定期航路が
開かれたのだ

この航路は
ボンベイと神戸を
結ぶもので
日本郵船によって
運行された

神戸
香港
ボンベイ
コロンボ
シンガポール

佐野社長の指導的な
役割が評価され
日本綿花はインド綿の
取り扱いにおいて
業界トップを
誇るようになった

日本綿花は
佐野常樹のあと
二代目社長として
「大阪財界の三大巨頭」
といわれた田中市兵衛が
就任することとなった

次の社長は
田中市兵衛さんか
どんな人か
知ってるか？

田中さんと言うたら
薩摩の松方正義
長州の伊藤博文
桂太郎とも関係が深いし
五代さんと一緒に
大阪の発展に
尽力されたお方や

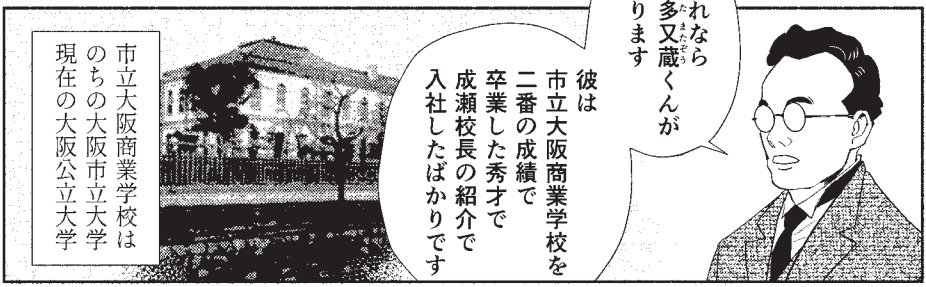
ほお～
それはすごい人やな！

あとは
曲がった事が
大嫌いやと
いう話や

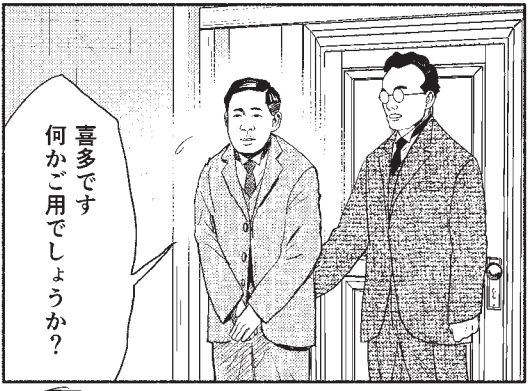
阪堺鐵道
（現・南海電気鉄道）の
線路がまっすぐなのは
創立に関わった
市兵衛さんの性格から
来ているらしい

社長に就任した
田中市兵衛は
さっそく新たな
手を打った
若手の登用である

優秀な学卒者を採用しろ
これからは
世界と戦うんだ
社内に優秀な若手は
いないのか？


それなら喜多又蔵くんがおります
彼は市立大阪商業学校を二番の成績で卒業した秀才で成瀬校長の紹介で入社したばかりです
市立大阪商業学校はのちの大阪市立大学現在の大阪公立大学

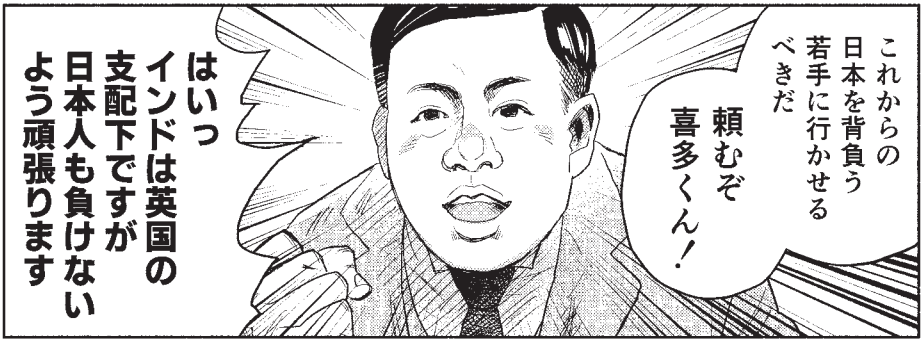
喜多君は奈良県葛城村の出身ですがお父上はあの喜多長七郎氏であります
なんと十年の歳月をかけて大果樹園を拓き南和鉄道の敷設にも尽力されたあの喜多氏の子息か早速呼んでくれ！


喜多です何かご用でしょうか？

君はうちの会社でいったい何がやりたい？

……では申し上げます社長
私を海外に遣ってください

よし、喜多くん
君に命じる
インドのボンベイに
行ってくれ
!!
社長っ
喜多くんはまだ入社二年目
十九歳です
しかもボンベイに日本人は
まだほとんどいません
だから行かせるんだ
日本の紡績業は今後も
発展するそのためには
インド産の綿花が重要だ


これからの
日本を背負う
若手に行かせる
べきだ
頼むぞ
喜多くん！
はいっ
インドは英国の
支配下ですが
日本人も負けない
よう頑張ります

こうして
明治二九（一八九六）年
喜多又蔵の
ボンベイ行きが決まった
喜多はその後
足掛け六年にわたって
インド綿の調達に
奔走する

明治三五(一九〇二)年
上席係長となっていた
喜多又蔵は
帰国の途につく

インドは
目処がついた
しかしただで
日本に帰る
わけにはいかない
帰りに中国に
寄ることにしよう

しかし
喜多係長
会社からは
帰国せよ
と……

心配ない
新社長には
きちんと
連絡してある
分かって
いただける
だろう

このとき
日本綿花の社長は
田中市兵衛の息子
市太郎がつとめていた

辰野金吾が設計した
本社ビル

インドの
喜多上席係長
からで
ありますか?

ああ
帰路に中国に
寄ると
書いてある

ええっ
やっと帰国できる
というのに……

喜多くんによると
次は中国だそうだ
父も信頼している社員だ
彼の目に
間違いはなかろう

喜多は
上海、漢口を視察し
中国の綿花市場に
ついても調査を
行なった

帰国後の重役会議で喜多は役員たちに報告した

これまで中国は綿花の供給基地でありました

しかし今や日本の紡績業界は国内の需要を満たしいよいよ海外に綿糸・綿布を輸出することによって成長が求められます

そのためには我々が新たな市場の前線に立ち開拓しなければなりません

そこで私はここに上海支店の設立を提案いたします！

何っ！しかし君今やわが国はロシアとの対立が激化しいつ戦火に巻き込まれるかも知れんのだぞ

いいえここで怯んではなりません中国は人口も多く日本にも近い市場として極めて有望です

それはそうだが……

中国市場を開拓しなければ日本の海外進出日本の加工貿易の発展日本の貿易立国の礎づくりは永遠にやってきません

また、中国は綿花だけでなくさまざまな資源が豊富にあります

中国進出は日本綿花の多角化のためにも必要なのです!!

——分かった

日本の未来を背負い上海支店を設立しよう

こうして日本綿花は明治三六(一九〇三)年に上海支店を翌年には漢口支店を設立喜多は二八歳の若さで支配人に抜擢された

そして日本の中国向け綿糸、綿布輸出も開始しその後拡大し続ける

いよいよ日本人が作った工業製品が海外に販売される

これが日本人の豊かさの源泉になるんだ

いっぽうで中国は綿花の供給基地として依然重要であった

綿花に水をかけて分量をごまかす華商もいるプレスをかけて水分を除去してから日本に送るんだ商売は信頼を得たものが勝つ

こうした独自の取り組みもあり日本綿花は中国綿の取り扱いでもトップに躍り出た

その後、喜多は中国の市場としての有望性を本社幹部に説き青島、天津、香港大連、牛荘、鉄嶺、長春、など次々と拠点を配備

日本の商社で最大級の拠点網を構築した

拠点網の構築だけ
では終わらなかった

綿花からは
油だってとれる
これを見逃す
手はない

日綿は
中国全土への
展開とともに
商品の多角化も
進めたのであった

喜多の進めた多角化は
大正六(一九一七)年
日華油脂(現・J-オイル
ミルズグループ)の設立
にもつながっていく

明治四三(一九一〇)年
田中市兵衛は
死の床にあった

あとは任せた
次は君たちの
時代だ
日本の産業を
……頼む

喜多君

はい
微力では
ありますが
粉骨砕身
いたします

はは
なにが微力だ……

市太郎は二年前に急逝し
市兵衛が再び社長に
就任していた
喜多は大きなものを
託された

後任の社長には志方勢七が就任
喜多は取締役に昇格する

日本綿花は
アドレナリンを開発した
高峰譲吉さんを頼って
日本で初めて
米国産綿花を調達した
アメリカは
世界最大の産地だ

やはり
さらなる拡大を
図るには……

アメリカだ!!

ついでに
私は世界一周出張
してくるとしよう

取締役となって以降も
喜多は自ら現地に
行くことを好み
たびたび海外を視察した

しかし
アメリカに拠点を
築くためには
駐在員が必要だ
山川くん
行ってくれるか?

山川萬吉（やまかわまんきち）

もちろんであります!!

ドッ

喜多の指示を受けた山川は
ニューヨーク綿花取引所に
日本人として初めて入会

日本綿花も
明治四三(一九一〇)年
テキサスのフォートワースに
出張所を開設した

テキサスの夏は
長くて蒸すのう……

しかしこれも
日本を富ませるためじゃ
こんなところで
へこたれるわけには
いかん!

大正元(一九一二)年当時
日本の工業の五割は
紡績業といわれた

そして綿花輸入の
トップレベルを誇った
日本綿花は大きく
業界を牽引したのだった